

論壇

日本学術会議における最近の国際活動と農学分野への期待

日本学術会議副会長 (国際活動担当)

武内和彦

2017年10月3日、日本学術会議総会において、山極壽一京都大学総長が苦渋の決断で会長を受諾された時には心底お気の毒だと思ったが、まさかその直後に山極会長から副会長 (国際活動担当) に指名されることは予想もしていなかった。副会長就任直後には、早くも事務方から膨大な資料を用いた説明があり、学術会議の国際活動が多岐に及んでいることに驚いた (図1)。10月5日には、横浜で開催された第12回アジア・オセアニア核医学会で、学術会議を代表して開会挨拶を行った。このようにして私の副会長としての活動が始まった。

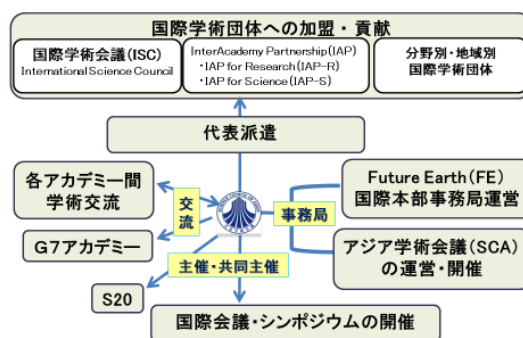


図1 日本学術会議の国際活動の概要 (日本学術会議作成)

副会長として国外の国際会議に最初に参加したのは、10月25～26日に台北で開催された国際科学会議 (ICSU) と国際社会科学協議会 (ISSC) の合同総会である。私は、25日午後に福井県若狭町で開催が決まっていた講演会はキャンセルできず、出席は無理だと思われたが、夕刻に小松空港から台北桃園空港へのフライトがあり、翌日の合同総会に間に合った。この総会では、正式にICSUとISSCの統合が決定した。自然科学と社会科学の融合を目指す国際学術会議 (ISC) 設立が決議される歴史的瞬間に立ち会うことができたのである。

2018年2月8日には、英国王立協会で開催された InterAcademy Partnership for Research (IAP-R) 理事会出席のためにロンドンに出張した。この組織は、IAP-Rのほか、IAP-S (Science)、IAP-H (Health) が緩やかに統合した組織であるが、いまだにそれぞれが共同議長と事務局を残している。IAPとして統合化したのは、これらIAPの国際的なプレゼンスを高めるためである。日本学術会議は、このうちIAP-RとIAP-Sに参加しているが、IAPという統合組織でどのように活動を続けるかについては、国際委員会でさらに検討の必要がある。

3月19～20日には、オタワでカナダ王立協会主催のGサイエンス学術会議が開催された。この会議は、G7首脳会議の主催国のアカデミーが開催するものであり、グローバル・アークティックとデジタル・フューチャーをテーマにG7首脳会議向けの共同声明について討議が行われた。学術会議からは私のほか、専門家の連携会員2名が出席した。とくに、グローバル・アークティックの議論ではカナダから先住民の伝統的知識を生かすべきとの意見があった。共同声明は、5月31日、首相官邸で山極会長から安倍総理に手交された。

7月3～5日には、パリでISC設立総会が開催された。私は、山極会長はじめ学会関係者とともに、この設立総会に出席した。ここでは、執行部の人事を決めるべく選挙が行われた。その結果、初代会長にはケープタウン大学の Daya Reddy 教授、次期会長には前ニュージーランド首席科学顧問の Sir Peter Gluckman 教授が選出された。私は、アフリカでのプロジェクトのため、翌8月には、ケープタウンで Reddy 会長と再会した。その後、彼とはさまざまな場で頻繁に会うことになり、いまではすっかり親しい関係となった。

9月25～28日には、福岡において第4回世界社会科学フォーラム(WSSF)が開催された。このWSSFは、ISCが最初に主催する大規模な国際会議であり、統合を反映して、自然科学系の研究者も多数参加して「持続可能な未来のための生存・安全の確保と平等」について熱心に討議が行われた。私は、ISCのReddy会長とともに、クロージングセレモニーで挨拶を行った。挨拶では、この会議が盛会裏に終了したことを祝うとともに、WSSFが統合後のISCにおいて、社会科学と自然科学の融合を促す意義深い機会となったことを述べた。

10月8日には、京都で開催された第15回科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)の一環として、学会主催の科学アカデミー会合が開催された。この会議では、最近大きな話題となっている海洋プラスチックの問題を含む「海洋生態系への脅威と海洋環境の保全」について、各アカデミーの代表に報告を求めた。学会会議は、2019年に日本で開催されるG20首脳会議に先立つ3月6日に、サイエンス20(S20)を同じテーマで開催する予定であり、海洋の問題解決に向けて学界から貢献したいと考えている。

日本学会が事務局を務めている国際組織にアジア学会(SCA)がある。吉野博連携会員が事務局長に就任している。毎年、アジア各地で開催しているが、2018年は、12月5～7日学会講堂で開催される。今回のテーマは、「アジアにおける持続可能な開発目標(SDGs)の達成」である。SDGsは学会でも重要なテーマとなっており、その達成のために学界がいかに貢献できるかを具体的に検討することは重要である。アジア各地の学術機関の参加により有意義な討議が行われ、成果が得られることを期待している。

こうした学会の国際活動に対する農学分野の貢献も大きい。2018年7月24～25日にアルゼンチンで開催されたサイエンス20(S20)は土壌がテーマになるということで国際土壌科学連合次期会長の小崎隆教授に出張していただき、「食料と栄養の安全保障—土壌の改善と生産性の向上」と題する共同声明へのインプットを通じて貢献していただいた。2019年3月に日本学会で開催されるS20は海洋環境がテーマであり、これについても水産学、環境学をはじめ農学分野からの貢献が大いに期待される。

また、農学分野は、もともと自然科学と社会科学をあわせもっている。国際学会における両者の融合に向けた取り組みを進めるうえで、これまでの農学分野における経験を活かしていくことができるのではないかと考えられる。同様のことは、現在、学会が国際本部事務局の一翼を担っているフューチャー・アース(FE)の取り組みに対しても言えるのではないかと。FEが目指す、学術の統合化と、学術と社会との連携による超学際的な研究の発展のためには、自然と人との望ましい関係づくりを目指す農学の視点が欠かせない。